

## 目次

### ●ニュース

防災・日本再生シンポジウム「濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」を開催	3
平成23年秋の叙勲受章者決まる	4
平成23年度大学の世界展開力強化事業に採択される	4
あいちサイエンスフェスティバル2011を開催	5
第34回経営協議会を開催	6
あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムシンポジウムを開催	6
日本・ウズベキスタン学長会議を開催	7
平成23年度秋季新入留学生歓迎懇談会を開催	7
平成23年度日本数学コンクール表彰式を挙げる	8
第7回高等研究院レクチャーを開催	8
第73回防災アカデミーを開催	9

### ●知の先端

神経変性疾患に対する革新的治療法開発 錫村 明生（環境医学研究所教授）	10
--	----

### ●知の未来へ

偏りのある情報を補正するための統計科学：マーケティング意思決定への活用 星野 崇宏（大学院経済学研究科准教授）	12
--	----

### ●部局ニュース

2008年ノーベル物理学賞受賞記念植樹式を挙げる	13
坂田昌一博士生誕100周年記念碑の除幕式を挙げる	13
第26回国際学術シンポジウムを開催	14
材料バックキャストテクノロジーシンポジウムを開催	14
第15回ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーシンポジウムを開催	15
第13回「まちとすまいの集い」を開催	15
世界化学年2011特別展示「祖国から見たマリー・キュリー」を開催	16
ICCAE 2011年度第6回オープンセミナーを開催	16
第4回2011高校生向けセミナーを開催	17
2011年秋季特別展を開催	17
第3回地球教室を開催	18
ミクロの探検隊を開催	18
和式馬術供覧を開催	18

### ●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年10月16日～11月15日

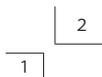
### ●イベントカレンダー

### ●ちょっと名大史

第10代総長 加藤延夫 — 名大をひきいた人びと⑩ —	28
-----------------------------	----

# 「防災・日本再生シンポジウム 濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」を開催





- 1 あいさつをする総長
- 2 パネルディスカッションの様子

防災・日本再生シンポジウム「濃尾地震から120年－その教訓を振り返る－」が、10月28日（金）、豊田講堂において開催されました。

山岡耕春環境学研究科教授の司会のもと、まず、濱口総長が開会のあいさつを行い、産業の中心である東海地方の地震対策の必要性について話しました。

シンポジウム前半は、4名の講演者による基調講演が行われました。最初に、伊藤和明元NHK解説委員が「濃尾地震の災害伝承の意義」と題して、濃尾地震の時の山地災害及び近年の内陸地震による土砂災害の状況について説明し、ダム湖で起こる津波被害に対する注意を喚起するとともに、情報伝達及び避難の体制を整備する重要性を訴えました。次に、岡田篤正立命館大学教授が「濃尾地震と活断層・地震研究」と題し、濃尾地震を起こした根尾谷断層等とその周辺にある断層の活動について講演しました。続いて、西澤泰彦環境学研究科准教授が「濃尾地震の建築被害とその影響」と題し

て、濃尾地震で被災した建築物を例に挙げ、その後の建築物への影響を説明し、地震で倒れなかった建築物に着目することや災害に対して官学一体で対応することの大切さを主張しました。最後に、武村雅之株式会社小堀鐸二研究所副所長が「濃尾地震と関東大震災」と題し、濃尾地震後の耐震政策と、その約30年後に起きた関東大震災後の更なる対策・政策、そして現在に至るまでの根気強く着実な耐震化政策が実を結んでいると話しました。

後半は、「濃尾地震の教訓を地震活動期の今にどう活かすか？」をテーマにパネルディスカッションが行われました。福和伸夫環境学研究科教授をコーディネータとして、平原和朗京都大学教授、鈴木康弘環境学研究科教授、堀宗朗東京大学教授、本学客員教授である隈本邦彦江戸川大学教授、栗田暢之NPO法人レスキューストックヤード代表理事の5名が、それぞれ地震学・活断層・土木系工学の研究者、メディア関係者、市民の立場から、テーマに沿って意見を述べました。各

パネリストは、陸・海を震源とする連動地震とその発生の偶然・必然性、「震裂波動線」と活断層の地震発生率の関係、理学・工学の枠を越えた断層形成の解明、正確な計算結果を出すための精度の高い入力データの追求、大規模な地震を想定した耐震対策の必要性、各々の地域での災害史知識と伝承の重要性などの話題を提供しました。

また、濃尾地震後に震災予防調査会が作成した事業計画の内容に触れ、既に120年前にすべきことが全て書き上げてあることを評価し、各パネリストが今後の課題として、国がすべきことと地域がすべきことのすみ分け、産官学民の協力、多面的人材育成、より高い耐震補強の周知、過去から学ぶことの大切さを挙げました。最後に、日本活断層学会長である島崎邦彦東京大学名誉教授が閉会のあいさつをしました。

当日は、400名を超える参加があり、濃尾地震を振り返るとともに防災・減災を考える良い機会となりました。

## 第73回防災アカデミーを開催

第73回防災アカデミーが、10月17日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

今回は、野田利弘工学研究科教授が、「液状化を含む地盤の地震時被害～なぜ起こるのか？どのようにして防ぐのか？」と題し講演を行いました。

野田教授は、土木分野の土質力学・地盤工学が専門で、



会場の様子

土構造物の挙動や被害について、詳細な予測評価手法や実験・被害事例調査などに基づいて研究をしており、東日本大震災では、過去最大級の液状化被害が発生した浦安市などの調査分析・報告を行っています。

講演ではまず、液状化による被害の特徴についてまとめ、次に、液状化の発生原因と対策方法について、実例と教材を用いて説明しました。続いて、東日本大震災における液状化被害について説明し、関東地域で甚大な被害が発生したのは、海岸沿いや河川の新しい埋立地が、数十メートルの深さに及ぶ軟弱地盤で増幅された揺れにより、長時間にわたって揺れ続けたことに主な原因があると解説しました。さらに液状化被害のほかに、仙台市周辺の造成宅地の被害、津波による防潮堤、護岸等の破壊など、東日本大震災で地盤被害に関連した災害の全貌を話しました。最後に、これらの結果を名古屋市の地盤状況に当てはめ、名古屋港周辺には新しい埋立地が広がっており、将来起こり得る大地震に際して液状化の可能性が高いとの意見を述べました。

当日は159名の参加があり、会場は満員となりました。

## 第15回ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーシンポジウムを開催

●ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）は、11月7日（月）、8日（火）の両日、VBLフロンティアプラザにおいて、第15回VBLシンポジウムを開催しました。

初日は、ナノコラム、ナノワイヤ、ナノチューブをテーマに、菊池昭彦上智大学理工学部准教授による「窒化物半導体ナノ結晶の作製とデバイス応用」、福山敦彦宮崎大学准教授



講演する菊池准教授（左）と杉山准教授（右）

による「Si基板上無触媒GaAsナノワイヤの光学的特性評価」と題した招待講演が行われました。菊池准教授は窒化物のナノコラム構造の作製に成功しており、その結晶構造の評価ならびに光デバイスへの応用について紹介しました。また福山准教授は、光学測定によって行ったGaAsナノワイヤ結晶の特性の評価について話しました。

2日目は、化合物半導体の超格子・量子構造をテーマに、杉山正和東京大学工学系研究科准教授による「高効率太陽電池を目指した半導体超格子の応用」、高橋正光独立行政法人日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究部門グループリーダーによる「放射光を利用した半導体ナノ構造成長の観察」と題した招待講演が行われました。杉山准教授は、エネルギー問題解決の鍵となる太陽電池開発の現状や半導体量子構造を利用した太陽電池の開発について説明しました。高橋グループリーダーは、世界最高性能の放射光源であるSPRING-8を用いて観察した半導体量子構造形成過程について話しました。

招待講演者による講演のほか、学内の研究者6名による研究成果も報告され、VBLが担当する最先端理工学特論の授業の一環として同シンポジウムを聴講した学生も含めた多数の参加者らにより、活発な質疑応答が行われました。

## 第13回「まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、11月5日（土）、ES総合館ESホールにおいて、第13回「まちとすまいの集い」を開催しました。今回は、「3.11後のまちとすまい－備えあれば未来あり－」をテーマとし、92名が参加しました。

まず、大森博司環境学研究科教授から、今年3月11日に発生した東日本大震災を契機に、まちとすまいに関する



質疑応答の様子

人々の意識は大きく変わりつつあり、復興や今後の備えのために何をすべきかを考えたいという今回の企画の主旨について説明がありました。

続いて、松岡利昌施設計画推進室特任准教授が「BCP（事業継続性計画）とDRP（災害復旧計画）」と題し、震災発生時の外国企業の対応等を紹介し、BCPやこれを支えるファシリティマネジメントの考え方について講演しました。次に、奥宮正哉環境学研究科教授が「無理なく減らして快適に」と題し、原発事故を契機にエネルギーシステムのあり方が問い直されている現状を踏まえ、ピークカットのための方策や自然エネルギーの活用について紹介しました。最後に、護雅史同准教授が「大震災に学び、来るべき地震に備える」と題し、東日本大震災における地震の揺れそのものによる建物やインフラの被災状況について報告を行い、東海地方で発生することが予測される大地震からまちとすまいを守るために為すべきことについて話しました。

講演後は、講演者が参加者からの質問に答える形でディスカッションが行われ、大学と地域の連携、防災危機意識の維持等について活発な質疑応答が行われました。